

* はじめに *

お調子者で、どこか憎めないウサギ。

そんなウサギたちが大活躍するむかしばなしを集めました。

『ウサギとカメ』、『因幡いなばの白ウサギ』、『かちかち山』の3話です。

えっ？ そんな話、どれも知ってるって？

いやいや、早合点はやがてんは禁物です。

それぞれの話には、意外な後日談があるんですよ。

さて、どんな話かな？ それは、読んでのお楽しみ！



ウサギとカメ（原話）

懐かしい『ウサギとカメ』のお話は、憶えておられますか？

ある野原で、ウサギとカメが出会いました。

ウサギがカメに言いかけた。

「や、あ、なにを言っているのだね。」

「見てのとおり、おかわばわ」

と答えるカメ。

これを聞いたウサギが、キラキラ笑いながら、言いました。

『かわばわ』だって？ おまえさんの歩くのがあんまり遅いから、おれはつき

り、道の真ん中でうずくまって、居眠りしてものかかと思つたよ。





再挑戦するウサギ

カメを見くびって思わぬ不覚をとったウサギは、それからというもの、ほかの動物たちから「居眠りウサギ」とあだ名をつけられ、さぞげん馬鹿にされました。

そればかりか、仲間のウサギたちからも、

「おまえは、ウサギ族の恥かけだ」

とあきれられ、いついかに口もきいてもらえない始末。

復讐心（あし）に燃えるウサギは、ある日、例のカメに、

「もう一度、おれと競走しないか」

と持ちかけました。

カメの家族や友だちは、

「前回は、運よく勝てたけれども、今度は、そううまくはいかないだろう。や





1. 因幡の白ウサギ（原話）

教科書にも載っていた『因幡の白ウサギ』のお話は、おおかたこんな内容でした。

因幡の国の沖合には、おせのしま隠岐島が浮かんでいます。

おかし、この隠岐島に一匹のウサギが住んでいます。

ウサギは、毎日のように丘の上へ入り、かなたに見える陸地をながめては、

「一度でいいから、海を渡って、あの土地を訪ねてみたいものだ」と想いをこぼしていました。

ある日のこと。

ウサギは一計を案じて、波間をゆくサメに呼びかけました。



そこで、ウサギがオオクニヌシの言いつけとおりにはしてみますと、あら不思議。ウサギのからだに、もとのふさふさの毛が生えてきたではありませんか。ウサギは大喜びです。

「この恩は、一生忘れまわさず」

と頭を下げるウサギに見送られながら、オオクニヌシは去って行きました。



ウサギの恩返し

ウサギと別れ、なおも旅を続けたオオクニヌシは、途中、地の底の国へ立ち寄りました。

そこは、スサノオという力自慢のおそろしい神さまが支配する国でした。

スサノオの宮には、スセリヒメという姫君みすめがいました。スサノオは、自分の子



かちかち山(原話)

『かちかち山』のあらはなしは、あらなごみですやね。

ばあさんをタヌキに殺されたじいさんは、毎日泣いてばかり。それを見かねた頭の黒いウサギが、かたき討ちをかってでます。

ウサギは、食い意地のはったタヌキを煎り豆でさそいだし、それを食べさせてあげるかわりといいことで、柴を背負わせて、運んでもらいました。

そして、うしろでかちかちと火打ち石をうつて、柴に火をつけました。そのうちに柴がぼつぼつと燃えだしたから、たまりません。タヌキは背中におおやけどを負い、命からがら逃げていきました。

タヌキが巣穴の中でウんウんうなっていますと、ウサギがやってきて、やけど





タヌキの息子

ウサギにたたき殺されたタヌキには、幼い子どもがいました。

この子タヌキは、大人になると、まちかねていたように、父タヌキのかたき討ちに乗りだしました。

ただ、かたきのウサギをさがし出そうと野や森をうろついていて、自分が猟師に撃たれて命を落としたり、元もとも子もありません。

そこで、タヌキは、種たねが島村しまむらの宇津兵衛うつべゑという猟師の家をたずね、父親が殺されたいきさつを涙ながらに物語り、かたき討ちを手伝ってくれるように頼みました。

タヌキ 「じいちゃんか、あの憎つくせウサギめを討つのに、お力をお貸しください。」

猟師 「お父ちちつつあんのごとは気の毒だとは思いますが、だからといって、人間

タヌキと猟師。世にも奇妙なとり合わせの誕生です。

かれらの噂は、またたく間に、かちかち山じゅつにひろまりました。

大きくて長い耳をもつウサギが、これを聞きのがすはずはありません。

身の危険を察知したウサギは、ひとまずかちかち山を離れて、江戸へ向かうことにしました。

三十六計、逃げるに如かず。その逃げ足の速さをや、文字どおり「脱兎はつとのごとく」でした。

もちろん、途中、切り株につまづいているひまも、なかつたことごとくじやう。



3. 軽右衛門かるえもんの悩み

とじこで、息子がいたのは、ウサギに殺されたタヌキばかりではありませんでした。